

福井藩靈岸島屋敷跡をゆく

——松平春嶽の江戸・東京

久住 真也

ふだん机に向かい、史料を読んだり文献を調べることが主な仕事だが、ときに気分転換もかねて歴史の現場に足を運び、考えを整理したり新たな発想を求めたくなることがある。たとえば、その現場に何も残されていないことも、その場を見て感じることはあるものだ。とりわけ、現在も増殖を続ける東京は、過去の痕跡を探したり、イメージすることが困難なことが少なくない。しかし、どれだけ時間が経過しても変わらぬ要素はあり（川や地形など）、過去を探す手がかりを求めたくなるのである。

福井藩（越前藩）三三万石、一六代藩主であった松平春嶽（慶永）は、幕末の「賢侯」の一人として知られている。当時の大名クラスの人物としては終始その動向が

注目され、福井藩が薩摩や長州、土佐などとならんで政局の中心たる位置を占めるうえで重要な役割を果たした。地元福井では、郷土の偉人として顕彰され、関連史跡も多い。しかし、春嶽の幕末史上の主要な活動場所は江戸と京都であり、特に江戸は春嶽にとり格別な場所である。すなわち、御三卿の田安德川家に生まれ、一才（数え）で越前松平家に養子に入るまでを過ごし、藩主としても隔年で滞在した場所、また、明治期の華族の一員として生涯を閉じた場所なのである。それにも関わらず、「地元」福井に比べれば、東京における春嶽の史跡はあまり聞くことが無い。小稿は松平春嶽を江戸・東京に探るための、時間と空間のささやかな小旅行である。



写真1 旧霊岸島付近からの眺望（筆者撮影）

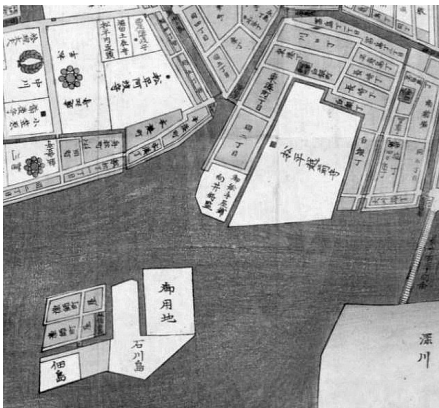


図1 「増補改正 築地八丁堀日本橋南之図」
（国立国会図書館デジタルコレクション）

江戸における春嶽の活動の痕跡が、墨田川の河口、東京湾と合流する現中央区新川一〜二丁目と表記される場所にある。江戸時代には霊岸島と称された区域である。まず、新川公園の碑が立つ隅田川沿いの土手に立つと、右手に中央大橋と対岸の高層マンション群が目に入る（写真1）。左に目を転じると、永代橋のアーチと遠方に

東京スカイツリーを視界に捉える。土手の手前は某企業の「ツインタワー」がそびえ、オフィスを人々が行き交う。このような景色からは想像しにくいのが、かつてこの付近に約三万坪に及ぶ福井藩の広大な中屋敷、霊岸島屋敷があった。

現在の東京は、埋め立て地が増えたことで、川や堀が縦横にめぐっていた江戸の面影を伺うのが難しい。そこで、安政五年の切絵図（図1）で確認すると、霊岸島屋

敷（「松平越前守」と書かれている）はその西隣に、堀を挟んで「將軍の船」を管理していた御船手向井将監の屋敷があるように、海に面している。霊岸島という呼称に相応しく、越前屋敷を中心とした一帯は、江戸時代初期から堀と川に挟まれた中島であり、地名は浄土宗の霊巖寺があったことになむ（明暦の大火で同寺は深川に移転）。絵図では、墨田川（海

側)と三方を堀で囲まれた屋敷自体が浮島のように見える。霊岸島屋敷が「海庭」と称されたゆえんだらう。また、当時の屋敷からの眺望を推定してみると、中央大橋でつながる巨大なマンシヨンが建つあたりは、「鬼平」こと火付盗賊改方長谷川平蔵の建議によって設けられた人足寄場があった石川島、その右手に佃島が見える以外は、江戸湾が一望できたであらう。

初めてこの場所を訪れたのは一〇年程前になる。幕末の一四代将軍徳川家茂の事蹟を調べていたおり、家茂と関わりが深かった春嶽の居所がこの地にあったことを知り、訪れたのである。そのおりは期待した史跡は何も発見できなかったが、ビルの谷間を吹き抜ける風、東京湾へと開けた隅田川の光景が妙に印象に残った。江戸時代のかつての大名屋敷跡と近代的高層ビルのギャップ、このアンバランスに妙に心を惹かれたのである。

幕末の春嶽の足跡は、この場所と深く結びついている。春嶽こと松平慶永は、文政一一(一八二八)年に田安邸(現日本武道館のあたり)に生まれ、明治二三(一八九〇)年、帝国議會開催の年に小石川関町口の屋敷

(現文京区)で六三年の生涯を閉じている。同時代で見ると、最後の将軍徳川慶喜より九才年長、西郷隆盛より一才年下である。ペリー来航時は福井藩主となつて一五年後、二六才のおりであった。

日本の近代は、ペリー来航に象徴されるように海からやつて来た。西洋文明の圧力は霊岸島一帯にも迫り、黒船が来航すると、この「海邸」から江戸湾防備のための福井藩兵が出勤し、同所で軍事訓練が行われ、若き春嶽も度々その状況を上覧した。屋敷の海側から見える漁師町の佃島は、浮世絵の題材として描かれたが、ペリー来航後、安政元(一八五四)年に水戸の前藩主徳川斉昭は、幕府の命により同所と隣接する石川島で軍艦建造に着手している。福井藩の奥医師であつた蘭学者坪井信良は、翌年四月の実兄宛の手紙のなかで、その「大軍艦」について、大船なので重いこと甚だしく、なかなか自由に動かず、水中に引き出せずに斉昭も大いに気を揉んだと述べている(『幕末維新風雲通信』、一〇六頁)。この軍艦建造のためのドックと化した佃島と石川島の変貌は、対岸の「海邸」から見えたはずである。福井藩で

も、幕府の許可のもと国元で大船建造に着手している
『奉答紀事』、一八九頁)。いわば、霊岸島周辺は、軍艦
に象徴される近代物質文明の風をいち早く受けた場所であ
った。

この場所の変化と平行して、春嶽は徳川一門の立場か
ら中央政局に積極的に関わっていく。春嶽の名を歴史上
に押し上げた契機が、將軍継嗣問題と日米修好通商条約
の調印問題である。特に前者について、徳川斉昭の七男
である一橋慶喜を將軍継嗣に据えるべく試み、腹心の橋
本左内を朝廷工作のため京都に送り込んだりした。大老
井伊直弼の無勅許条約調印に際しては、斉昭らとともに、
不時登城を行い、直弼らによって隠居・謹慎という
憂き目にあった。数えて三一歳という壮年で、政治舞台
から追放されたのである。人生の大きな挫折であった。
ところで春嶽の実名(諱)は慶永、通称は越前守であ
るが(松平越前守が公式の呼び名)、隠居に伴い、幼年
より用いていた雅号、春嶽を通称として用いることにな
った。史料では「改名」とあるが、本稿が用いる「松平
春嶽」という名前は、このとき公式のものとなったので

ある(のちに「大蔵大輔」に改名、春嶽は号として終生
使用した)。隠居と改名の直後、「春嶽」は安政五年一
月に江戸城の常盤橋御門内にあった上屋敷から、中屋敷
の霊岸島屋敷に移り、隠居謹慎の生活を送る。上屋敷は
跡を継いだ新藩主(松平茂昭、分家糸魚川藩より継承)
のための場所である。春嶽に対する幕府の監視の目は厳
しく、藩政への関わりを否定された春嶽は、江戸城から
離れた「海邸」に居を移さざるをえなかったのである。

霊岸島屋敷の歴史は長い。寛永一一(一六三四)年に
三代藩主が幕府より拝領したのに始まり、時に上屋敷の
機能を持ちつつも、幕末期には中屋敷として位置づけら
れた。また、同所は度重なる火災や災害による被害に見
舞われ、春嶽の隠居決定時も満足な建物はなかったよう
であるが、簡略な普請を行い幽居兼隠居場ができた。い
わば、幕末の「海邸」は春嶽の存在と切り離せない。春
嶽はこの場所で約四年の歳月を送り、幕末政治での本格
的な活動はこれ以降であることを考えると、「松平春嶽」
として再出発したこの場所は、春嶽の人生の転機、リセ
ットの場所であったと言える。

現在、オフィスが並ぶこの界限も、それなりに江戸時代に誘う要素がある。東京駅八重洲口を出て、新川方面に向って八重洲通りを進み、オフィス街を抜けていくと、やがて隅田川に合流する亀島川に架かる亀島橋にいたる。この付近は現在も八丁堀の地名が駅名や周辺に残り、橋の西詰には、この地に居を構えた人物として東洲斎写楽、伊能忠敬の説明板や芭蕉の句碑、道路を挟んで堀部安兵衛の大きな碑文も見える。江戸を代表するそうした顔ぶれといったところである。この亀島橋はもちろんだ時の姿では無いが、春嶽の大名行列が渡る事があつたかも知れない。

亀島橋をまっすぐ進むと現在新川に名称が統一されたかつての霊岸島一帯である。春嶽時代の面影は、新川一丁目にある中央区立越前堀児童公園の「越前堀」という名称（霊岸島屋敷を三方で囲んでいた堀、水路）とその説明板、公園内につくられた、地名消失を憂えた有志による「霊巖島之碑」くらいである（写真2）。

字名に用いられた新川は、かの河村瑞賢によって掘削された運河で、現在は埋め立てられていて存在しない。かつて、堀や川の水運に恵まれたこの土地は、酒蔵が並び流通が栄えた場所として『江戸名所図会』や錦絵にも描かれている。日本橋にも近く、江戸の商人による活気あふれる場所だったのである。

それとは対照的なのが春嶽の謹慎生活である。春嶽の腹心中根雪江の『奉答紀事』によれば、春嶽は昼夜とも



写真2 霊巖島之碑（筆者撮影）

礼装である上下（袴

を着して一室に籠もつたといい、さらに、「公ハ殆五期の久しきを閑室に巻を繙きて、古今之賢聖を師友とし給ひ、幽窓に筆を弄して、不易の風月に吟嘯し給ふ」状況だったと述べている（二二二

（二二三頁）。

万延元年（一八六〇）九月四日に謹慎が解かれたが、依然国元に帰ることは許されず、行動にも制約が課された。それでも、春嶽の喜びは次の漢詩から伺うことができる。

三歳閉門靈岸洲 三歳閉門さる 靈岸の洲

晨昏海氣暗書樓 晨昏しんぐんの海氣 書樓に暗し

豈図今日蒙寬典 豈に図らんや 今日寬典を蒙り

飽領恩風惠露秋 飽くまで恩風を領く 惠露の秋

（『春嶽遺稿』卷二）

すなわち、三年間靈岸島に幽閉され、朝夕の海の気が書齋に暗くたちこめる、思いがけず今日赦しを蒙り、十分に恩恵に浴する、この恵み深い露を受ける秋であることよ、という内容である。ここでは、一室に籠もり続けた暗い謹慎生活と、予想しなかった赦免による喜びの対比があざやかである。この年の三月三日に桜田門外の変があった。そこから幕府の政治は次第に変化し、將軍継嗣問題に関わった一橋派と言われた人々の復権がなされる。春嶽の完全復権はさらに一年半後の文久二（一八六

二）年四月二五日である。その直後、五月朔日に藩主茂昭の招きをうけて上屋敷を訪れた際、主なる家臣団は春嶽の前に「感涙に咽むせひた」という（『奉答紀事』二二二頁）。

若き一四代將軍徳川家茂と初めて対面したのは、六日後の五月七日である。この屋敷から行列を組み、日本橋界隈の賑わいを眺めつつ江戸城へと西に進んだときの気持ちはいかなるものであったか。隠居の春嶽は、時をおかずして幕政参画を命じられ、さらに七月には新たに大老に代わる政事総裁職という役職に就任した。以後春嶽が登城した際は、殿中を御徒目付が先払いし、城内も見附でも春嶽が通るときには総下座、往來止めとなった。「御威勢大老職よりも超越セリ」という状態であった（同右、二三〇頁）。つい昨日まで各人だった春嶽に対する劇的とも言える待遇の変化は、そのまま政治の不安定さを象徴しているかのようである。

ところで、「海邸」から江戸城までは、大名行列の行程として近い距離ではない。政事総裁職は基本的に毎日出勤である。そのため閏八月に入り老中より内談があり

「海邸御手遠御不便につき」という理由で、特別に藩主のいる常盤橋の上屋敷への引き移りが認められた（同右、二三一頁）。藩主と隠居兩人揃っては手狭になるということで、隣接する他家の屋敷を添屋敷として拝領するという厚遇ぶりである。

こうして霊岸島屋敷を離れた春嶽は、やがて江戸自体からも離れていく。將軍家茂が二二九年ぶりの上洛を行うことになり、政局の中心は一挙に京都へと動く。家茂に先立ち上洛すべく、文久三年の正月二三日、雨のなか品川より順動丸という蒸気船で、江戸をあとにした。

以後の春嶽は、京都と国元を往復する生活となり、朝廷と幕府の政治に関わり、慶応三年の大政奉還から王政復古政変による新政府成立、幕府倒壊を京都で見届けることになる。

三

春嶽が江戸の地を踏むのは、江戸が東京となったのちの明治二（一八六七）年四月である。福井藩の常盤橋屋敷に入ったのは、文久三年以来六年ぶりのことである。

その直後に版籍奉還が行われ、春嶽ら旧大名は新たに華族に編成された。その直後、春嶽は政府の民部官知事、民部卿、さらに大蔵卿を兼任、その後は大学別当兼侍読として若き明治天皇の学問指南にあたった。しかし、華族となった旧大名たちは次第に政治の表舞台から去る。政治を動かすのは、もっぱら藩士出身の官僚（士族）たちである。明治三年七月に春嶽は官を免じられ、麿香間しやうま祇候しごという名誉待遇となる。以後は「皇室の藩屏」として、儀礼や行事への参加が中心となっていくのである。

それより前、「海邸」は明治二年に政府によって上知され、春嶽は同四年以降、隅田川の河口の霊岸島から内陸へ遡った、浅草の橋場町（現荒川区南千住）の真崎別邸に移った。その後、大川端から離れ小石川水道町の屋敷、晩年は同じく小石川の関口町に転居した（いずれも現文京区）。春嶽の終焉地である関口町は、現在の東京メトロの江戸川橋駅で下車して、目白坂を登ったところにあった。明治以降、貴顕の屋敷は江戸時代の海や河など水辺から、「高燥の地」、すなわち高台の見晴らしの良い場所へと移っていくと言われるが、春嶽の場合もまさ

しくその法則通りである。関口町から比較的近い、同じく「山の手」に徳川慶喜が晩年を過ごした小石川の第六天町の屋敷があった。その地は現在仏教系大学の敷地になっているが、やはり今井坂という坂上に位置する。

他方、海に近い霊岸島一帯はどう変化していったか。「海邸」に隣接していた御船手屋敷には、明治二二年に設立された東京湾汽船会社の発着所が置かれたという。また、石川島造船所が設立されたのも同年であった。その場から近代化していく日本を感じ取ることができただろう。現在、屋敷跡から左方向に見える永代橋を渡ると、江東区の門前仲町に通じる。そこにいたる途中、大島川に架かる橋詰には、明治九年に築かれた洪沢栄一宅の説明板(写真3)と「洪澤倉庫発祥の地」の碑に出会う。「日本資本主義の父」こと洪沢の深川福住町屋敷跡である。

洪沢は旧幕臣から明治新政府の官僚となり、その後生涯を通じて五〇〇を数える事業に関わったことで知られる。周知のように洪沢は幕臣として徳川慶喜に仕えたが、春嶽とは幕末期には直接的な関係は無い。しかし、



写真3 深川の洪沢栄一宅跡 (筆者撮影)

両者には意外な共通項がある。洪沢は、明治期になり寛政の改革で著名な松平定信を深く尊敬し、その伝記編纂も行ったことで知られるが、その定信は田安家初代宗武の七男で、八代將軍吉宗の孫にあたり、その末裔である田安家出身の春嶽が敬慕した存在であった。そんな両者の痕跡が意外に近いところにある。ちなみに、霊岸島の名称の元になった深川の霊巖寺は定信の菩提寺でもある。

明治維新を経て、時代をリードする人々は交代した。前述の霊岸島から見える石川島造船所、そして東京湾汽船会社は洪沢が深く関わっていた。他方、かつて霊岸島に存在した巨大な大名屋敷は消滅し、大川を挟んで対岸

に新興の社会的リーダーたる洪沢の屋敷跡を見る。その地には現在も「洪澤シテイブレイス永代」というビルが聳え、霊岸島方面の海を見渡しているようでもある。

また、春嶽の終焉の地となった目白坂の台地にも、そこを歩く限り春嶽を思わせるものは何もない。目につくのは、「ホテル椿山荘」の看板、すなわち、明治・大正期に政界に君臨した山県有朋邸跡である。洪沢も山県もいずれも下級武士から成り上がっていったことを考えれば、明治維新はやはり一種の革命だったと言えるだろう。春嶽は政治の表舞台から退場して以後、明治一〇年代を中心に回顧録や随筆の執筆に力を注いでいく。そこに描かれる幼少期は、一代將軍徳川家斉の大御所時代と重なり、その家斉（春嶽の伯父）や松平定信に関する随想は、いまだ全盛であった江戸を彷彿とさせ、霊岸島屋敷もしばしば登場する。

また、幕府制度について記した「前世界雑話稿本」の序文には、「明治ノ聖代ヨリ見レハ、徳川時代ハ前世界ナリ余ノ胸中ニ記憶スルノ事ヲ記シテ、新世界ノ衆庶ニ示ス、余ノ頑固ヲ笑フコトナカレ」とある（『松平春嶽

全集』一、二一七頁）。執拗な徳川時代へのこだわり、思い入れは、「徳川人」とでも表現すべき春嶽の自負、時には明治という時代への不満の表現のようにも見える。時代をリードした「賢侯」と評される春嶽にとって、明治維新とは何だったのだろうか。霊岸島屋敷跡に立つと、新たな問いを立ててみたくなる。

主要参考文献

- ・ 『福井県文書館資料叢書8 越前松平家家譜 慶永5』（福井県文書館、二〇一一年）
- ・ 中根雪江『奉答紀事』（東京大学出版会、一九八〇年）
- ・ 松平春嶽全集編纂刊行会編『松平春嶽全集』一（原書房、一九七三年）
- ・ 東京大学明治維新史料研究会・宮地正人編『幕末維新風雲通信』（東京大学出版会、一九七八年）
- ・ 『東京都中央区新川二丁目遺跡Ⅱ』（中央区教育委員会、二〇一七年）
- ・ 『大名華族たちの明治』（図録）（福井市立郷土歴史博物館、二〇一五年）

- ・鈴木博之『シリーズ日本の近代 都市へ』（中公文庫、二〇一二年）
- ・公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』（東京堂出版、二〇一二年）
- ・『ぶんきょうの町名由来』（文京区ふるさと歴史館、一九八一年）

〔付記〕

湯城吉信先生には漢詩の解釈についてご教示をいただいた。記して謝意を表したい。